

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 **黎明**



明報感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0096号
護國青年會議機関紙 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成24年9月20日

袖にされた知事と地権者の心変わり

キーワードは恫喝と裏切り、突然の国への売却

「国がやらないから俺がやる！」東京都の石原慎太郎知事が購入に言及したのが本年4月のワシントンでの講演だった。以来、埼玉県在住の地権者・栗原國起氏の実弟の弘行氏は「国を守る気構えが無い民主党政府は信用できない。石原都知事なら島を託すことができる。これは男と男の約束だ」と一貫して述べていた。国を憂える人々の寄付金は14億円を超えた。東京都は洋上からの調査を行い、石原都知事は来月、再調査のために自ら上陸する意欲を表していた。そこに唐突に飛び込んできた『尖閣、国購入で合意』のニュース：尖閣は守れるのか。日本の国防はどうなるのか。

編集人・戸出蒼流

代表再選を最優先した野田

8月のある日曜日、たちあがれ日本の園田博之幹事長（左写真）の仲介により、都知事は首相官邸で、野田と極秘



会談を行った。会談の内容は言うまでもなく尖閣購入問題である。都知事は、最低限の施設、例えば日本の漁船が避難できる『船だまり』や無線基地を整備することを条件に国が購入し、実効支配することを提言した。信じられないことだが、野田は、この時点では都知事の提言を受け入れたという。

独立総合研究所の青山繁晴代表（左写真）によると、今月5日、青山は、民主党の中では数少ない良識派の首相補佐官（筆者の推測では長島昭久衆院議員・右下写真）と



尖閣購入について意見交換した。青山は、補佐官に「国



は『日本人を上陸させない、資源環境調査をしない、開発しない』という中国の方針に従う為に買うのだろう。そんなことに協力して、アンタ、日本の国会議員として恥ずかしくないのか！』と怒りをぶつけたところ、補佐官は「私は、国が買ったなら、きちんと施設を造るということを経理に進言し、総理もそれを受け入れたんです」と反論した上で「しかし、外務省が『対中関係に致命的な悪影響を与える』と横槍を入れて来たんです」と外務省の容喙を明らかにした。外務省からクレームが入るまで、野田は少なくとも『船だまり』設営は決めていたが、優柔不断の見本のような男、グラグラと揺れ始めたのである。



刺したのは、フランケンこと岡田克也副総理（上写真）である。岡田は、党

の代表選で、いち早く野田再選支持を表明している。岡田は、揺れ動く野田の心中を見越して「アンタの再選の流れをつくったのは、このオレだ」と野田に恩を売って、

「外務省の言う通り、尖閣に『船だまり』なんか造ったら大変なことになるぞ」と脅かした。元々蚤の心臓の野田は、岡田のひと言で震え上がり『上陸させない、調査しない、開発しない』という支那の方針に従うよう軌道修正してしまつたのである。要するに野田は、己の命脈を保つことを最優先し、都知事と補佐官を裏切り、支那の意を酌んだ岡田の恫喝に屈してしまつたのである。

油揚げをさらわれた東京都

東京都が地権者の代理である栗原弘行氏（下段写真）と



売買交渉を開始したのは、1年前に遡る。昨年9月



を伴い、さいたま市の栗原家を訪問した。購入への道のり

と『男と男の約束』は、この時から始まつた。

前述したように、都知事は本年4月、訪問先のワシントンで尖閣購入を明言し、自ら呼びかけた寄付金も14億円を超えた。一方、野田も7月7日、唐突に国有化の方針を表明、それぞれ別々に地権者との交渉を続けてきた。

そして9月2日、東京都は独自に洋上調査（左写真）を敢行した。ところが、翌3日には藤村官房長官が「地権者が国へ売却の意向を持っている」と述べて3島の地権者である栗原國起氏と、国側の交渉役である長浜博行官房副長官（次頁写真）が帝国ホテルで面談し、合意にこぎ



合意にこぎ



つけていた。この長浜という男は、パリの外国人参政権推進派で、何より徹底した自虐史観の持ち主である。こんな奴が、日本の国益を利用する政治をするとは思えない。案の定、支那の顔色を窺う野田の命に従った長浜は、地権者を宥め騙して、知事を騙し打ちにする片棒を担ぎ支那への忠誠心を露わにしたのである。

そもそも腰の重い政府に代わり、石原知事が尖閣購入と、真の実効支配を宣言したことで国民の間で「尖閣を守ろう」という気運が高まった訳で、東京都にすれば、まさにトンビに油揚げをさらわれたことになる。

栗原氏の心変わり理由とは…

東京都の猪瀬直樹副知事（写真）は、政府の理不尽な容喙に対して舌鋒鋭く批判している。



「野田さんは尖閣を購入して何をするのか、何もしないなら引っこんでいればいい。8月19日に知事が、野田さんに会い『国が買うなら、漁民の安全に配慮して、せめて船だまりを造って欲しい』と要請したら野田さんは『要請は真摯に重く受け止めます』と言っておきな

ら、今月4日には『何も造りません』と伝えてきた。国は、中国の方針に従い、何も造らないために、東京都に何も造らせないために買うのではないか。何もしないで放置しておくならばこれまで同様、借り上げた形にしておけばいい。こんなふざけた話があるか」

石原知事は4月に購入計画を発表してから、一貫して「地権者は都が買うことに同意している」と述べていた。地権者は「国に売るつもりはない。売却先は東京都、これは男と男の約束だ」と、これまた一貫して述べていた。では何故地権者は心変わりしたのか。これまでの経緯から考えられることは二つ、一つは、何らかの強い圧力が地権者に及んだこと、もう一つは地権者がカネに目が眩んだこと、心変わりの原因はこの2点であることは、ほぼ間違いないことだろう。

強かな地権者の吊り上げ作戦
尖閣諸島の地権者である栗原家は、地元のさいたま市では資産家として有名である。当主の國起氏は、市内に多くの不動産を所有し、賃貸料だけでも年に3000万円以上の収入があるという。しかし、それらの物件には現在、複数の金融機関によって、合計40億円の根抵当権が設定されていて、20年前の根抵権さえ未だに抹消されていない。その原因として、栗原家のスポ

ークスマンを自任する3男の弘行氏が事業に失敗して多額の負債を抱えたことが指摘されている。そんな事情を抱える國起氏だから、少しでも高く、そして早く売れる方を重く考えたに違いない。

巷間伝えられるところによると、東京都は栗原家に20億3000万円の提示をしていたようだが、その情報をキャッチした政府は、東京都の提示した金額に2000万円上乗せし、國起氏を口説き落とす。國起氏には必要なカネがあり、議会の承認を得るといふ東京都の手続きは待てなかつたようだ。

栗原家が『男と男の約束』を反故にし、尖閣を国に売却する決め手となった要因のひとつに政府の圧力と遠回しの恫喝があったことは想像に難くない。週刊誌の報道によると、政府側の担当者は、國起氏が単に多額の借金を抱えているという事実だけでなく、税金問題等で叩けば埃が出るということを知ったようだと、交渉の席上、その点を仄めかしたようだ。

化けの皮が剥がれた栗原兄弟
どのような事情があったにしても、栗原兄弟が知事を裏切り、尖閣を反日左翼政府に売却したことは事実である。

愛国者の仮面をかぶり、国土を気取ってテレビにしゃしゃり出していた弘行氏の実の娘は「父は『領土を守る国土』のような

顔をしてテレビに頻繁に出ていますが、そんな人物ではありません。カネと女にだらしなく、虚言癖のある詐欺師のような男です」と実の父を斬って捨てている。また元妻は「都と国を天秤にかけ、のらりくらりと交渉を長引かせてきたのは、尖閣を高く売りつけるためです」と衝撃の告白をしている。

栗原兄弟が国に売却すること



起したのが石原知事であり、偏狭どころか壮大な民族主義の表われである。

ツケは誰が払うのか？

その石原知事を裏切った栗原兄弟の罪は重く、断じて許してはいけぬ。テレビや新聞各社は、何故か『地権者の男性』などと匿名で報道しているが、週刊誌のように実名で報道し、その顔を公表すべきである。

購入の話が出た当初、尖閣の評価額は、3〜4億が妥当と言われていた。ところが東京都に寄せられた寄付金が14億円を超えたことから、尖閣の価格は一気に跳ね上がったのである。この頃から都の購入計画は軌道に乗り始め、危機感を覚えた政府は、20億5000万円を提示し、横取りを画策したのである。

昭和45年に栗原家が、福岡県の古賀辰四郎から尖閣を譲り受けた金額は4600万円だった。それが都知事と国を愛する国民のお蔭で14億円にもなったというのに満足せず、カネに目が眩み国に寝返ったのだ。

支那の忠犬と成り果てた野田とカネの亡者の契約は、支那を増長させるだけである。一体そのツケは誰が払うというのか？